



マレー半島の伝統農村におけるマレーシアホームステイプログラムの特徴に関する考察：セランゴール州における稻作村でのドランニホームステイを事例として

ビンティ ラメリ, ロハスリンダ
山崎, 寿一

(Citation)

農村計画学会誌, 32:161-166

(Issue Date)

2013

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003050>



マレー半島の伝統農村における マレーシアホームステイプログラムの特徴に関する考察

セランゴール州における稻作村でのドラニホームステイを事例として
A Study on Characteristics of Malaysia Homestay Program at Traditional Village in Malay Peninsula
A Case Study of Dorani Homestay at a Paddy Village in Selangor

ロハスリンダビンティラメリ * 山崎寿一 **

Rohaslinda Binti Ramele * Juichi Yamazaki **

(*神戸大学大学院博士後期課程 **神戸大学大学院工学研究科教授・博士（工学）)

(*PhD Candidate, Graduate School of Engineering, Kobe University **Prof., Graduate School of Engineering, Kobe University, Dr.Eng.)

I はじめに

1 研究背景

マレーシアは 1957 年にイギリスより独立したマレー系、中国系、インド系を主な民族とする多民族国家である。民族によって、中国系は都市に居住し、商業に従事、マレー系は農村に居住し、農業に従事、インド系は都市に居住し、サービス業に従事、または農村プランテーションに従事するものが卓越しており、居住地や職業のすみわけに民族的な特徴がある¹⁾。近年日本では海外の長期滞在先としてマレーシアの人気が向上し、さらに修学旅行の訪問先としてマレーシアの農村が注目を浴びるようになっているが、農村の実情や農村地域政策の情報は極めて乏しいのが現状である。学術的なレベルでも、統計的整備が遅れ、農村の実態把握が進んでいない。

2 研究目的

本研究は、マレーカンポン（Malay Kampung：マレー語でマレー村）の伝統的環境・生活文化の保全と活用に関する一連の研究の一部である²⁾。本稿では、マレー半島における農村集落の概要と農村地域開発政策の展開を整理したうえで、1995 年に伝統農村で導入されたホームステイプログラムの政策面・コンセプト・コミュニティの参加・対象の特徴を明らかにすることを目的とする。

3 研究方法

本稿では、1995 年に本格的に始まった「マレーシアホームステイプログラム」に関わる観光省と農村地域開発省におけるヒアリングと資料収集によって得られた首相省の「マレーシア 5 カ年計画」³⁾、観光省の「農村観光マスター プラン」⁴⁾、住宅地方自治体省の「農村マスター

ープラン」⁵⁾・農村地域開発省の「農村アクションプラン」⁶⁾を本研究の基礎資料として収集した。本稿では、まずこれらの現地行政資料を分析し、マレー半島における農村の概要・農村地域開発政策の展開を整理し、マレーシアホームステイプログラムの政策上の位置づけを明確にした。次に、マレー農村のなかでも、農村類型の代表である伝統農村（稻作村）で、ホームステイプログラムの成功事例として観光省から評価を受けているセランゴール州におけるドラニホームステイを対象にし、2013 年 2 月に行った現地調査とホームステイ委員会の会長・委員・ホストファミリーへのヒアリングを行った。

本稿では、上記の収集資料と現地調査によって得られた情報を用いて、次の諸点を研究課題に設定し考察する。

- (1) マレー半島における農村集落の概要と 1957 年以降の農村地域開発政策の展開を整理したうえで、1995 年から 2013 年に至るマレーシアホームステイプログラムの展開及び特徴を明らかにする。
- (2) 成功事例としてマレーシア観光省によって評価を受けているセランゴール州におけるドラニホームステイを対象にし、ホームステイプログラムの実態を明らかにする。特にプログラムの内容、ホストファミリーや受け入れ農村コミュニティとの関わり方に注目して考察する。

II マレー半島における農村集落の概要と農村地域開発政策の展開

1 農村集落の概要

イギリスからの独立以来、マレー半島の農村では、マレー系民族が主に住んでいるため、マレーカンポンとしても呼ばれている。

2009年にマレーシア住宅地方自治体省が公表した「農村マスタープラン」³⁾にボルネオ島を除くマレー半島のみの農村統計情報が収録されている。この資料によるとマレー半島の農村における集落数は14,003である。そのうち調査された数は9,755である（調査に含まれない集落は、小規模集落、農家散在集落である）。

マレー半島の農村集落は、93%が自然集落で7%が計画集落である。自然集落は伝統農村・漁村・水上村・オランアスリ村に区分されるが、90%が伝統農村である（表1）。伝統農村は、マレー系民族住民が住む伝統文化を維持する集落で、主要作物から見ると稻作村と果樹栽培村に分類できる。また漁村と水上村では、漁業が主な経済活動になるが、リゾート化によって水上村は減少傾向にある。オランアスリ村はマレー半島における先住民族の住む山村である。計画集落には、フェルダ村（FELDA村）と計画村があり、独立後貧困層の近代化を目的に新たに建設された。フェルダ村は無職業の村民達のために新しく開発されたパーム油のプランテーションの大規模集落である。計画村は、パーム油に限らず、土地と住宅を持っていない農民のために新しく開発された集落である（農村分類の区分は、上記報告書による区分である）。

表1 マレー半島の農村の分類

Table 1 Type of Village in Malay Peninsula

| 農村の種類 | | 数 |
|-------|---------|-------|
| 自然集落 | 伝統農村 | 8,770 |
| | 漁村 | 135 |
| | 水上村 | 2 |
| | オランアスリ村 | 201 |
| 計画集落 | フェルダ村 | 232 |
| | 計画村 | 415 |
| 合計 | | 9,755 |

出典：マレーシア住宅地方自治体省（2009）³⁾

2 農村地域開発政策の展開

マレー半島の農村には、農業と漁業に従事するマレー系民族が居住しているが、他の民族に比べて経済力は弱く、貧困・若者の減少・環境と景観の悪化・情報の未整備状況等の問題が存在した。独立後、マレーシア政府はこの問題を解決しながら農村の開発を進めている。

1957年に、連邦土地開発局（FELDA：Federal Land Development Authority）が設立され、マレー半島にフェルダ村を建設した⁴⁾。ここでは新しいパーム油の農業生産用地と住宅用地が開発され、無職業の村民に住宅と農業の仕事が提供された。

マレーカンポンでは、独立前から集落の組織としてモスク委員会や若者委員会が存在していた。1960年には農村の社会組織が整備され、行政の末端組織としての役割

も担う村安全開発委員会が作られ、従来の村長が委員会の会長を兼ねることになり、農村地域開発に従来の村コミュニティの参加が見られるようになった。その他、女性委員会・農業委員会・地方政治委員会も作られ、農村でのコミュニティ活動やイベント等が活発になった。

1970年に、新経済政策を対象とする住宅・教育・経済活動等に対する優遇政策である「ブミプトラ政策」^{注1)}を進められた。この政策によって農村での農業と漁業に対する助成と施設整備を中心とする農村地域開発が進み、農村に住むマレー系民族の経済力が向上した。

1980年代の後半に、新たな農村地域開発の動きが活発化していた。その代表が伝統農村における村ツーリズムであり、都市に住むマレーシア人の中で、家族の週末旅行と結婚式場として農村でのリゾートがブームになった。1995年に、マレーカンポンが新しいツーリズムプロダクト（tourism product）として注目され、観光省によってホームステイプログラムが策定されることになった¹⁰⁾。

村ツーリズムはマレーシア首相省に注目されるようになり、1996年の国家開発計画レポートである「第7次マレーシア計画」⁵⁾では、村ツーリズムを支援するために、農村での公共施設の整備費としてRM580万（580万マレーシアリンギ：約17,743万円）が計上された。

また、2001年に、マレーシア観光省は世界観光機関（UNWTO：United Nation World Tourism Organization）の協力で村ツーリズムの振興を目指した「農村観光マスタープラン」⁶⁾を作成した。その中で、ホームステイプログラムを含む農村で行うエコツーリズム・アグロツーリズム・島ツーリズムが国のツーリズムプロダクトとして認められた。

その結果、2001年から2006年にかけて、国全体の観光客の数が1,278万人から1,740万人に増加し、観光産業が国の主な経済資源としても注目されるようになった⁷⁾。そして2009年には、マレーシア農村地域開発省によって農村のコミュニティと一体的に農村開発を進める「農村アクションプラン」⁸⁾が実施される。この計画には、マレーシアホームステイプログラムを始め、村ツーリズムが農村開発の主要メニューとして提案され、観光産業に対するコミュニティの参加が盛り込まれている。

III マレーシアホームステイプログラムの展開と特徴

マレーカンポンにおけるホームステイは1970年代から始まった。その最初の事例として紹介されているのは、パハン州におけるマレーカンポンに住む女性が自分の民家を宿泊施設として観光客に提供した事例である⁹⁾。

1980年代の後半に、外国の文化を学ぶ「マレーカンポンにおけるマレー民家のホームステイ」が日本人学生交換プログラムで取り上げられるようになり、マレーカンポンに数多くの日本人学生が訪れるようになった。マレーシア観光省はマレーカンポンにはツーリズムプロダクトとしての価値があると評価し、1988年にパハン州のデサムルニ村（Kampung Desa Murni）をモデルとしてマレーシアホームステイプログラムを始めた。ホームステイプログラム導入後、この村では、観光客の数が増加し、収入も拡大した。その成功によって、1995年には、このプログラムは正式な政策として確立し、マレー半島とボルネオ島全域で行われるようになった。

マレーシアホームステイプログラムは、村民を積極的に観光産業に参加させることとマレーカンポンを新しいツーリズムプロダクトとして提供することを目的として策定された¹⁰⁾。このプログラムは「観光客がホストファミリーと住み、その家族の日常生活とマレーカンポンの文化を体験するプログラム」として観光省によって定義され、単なる宿泊ではなく、マレーカンポンでの生活体験が主な内容になっている。他のホームステイプログラムと異なり、国家レベルで農村地域開発の一部としてマレーシア観光省が主に関わり、村全体がそれに参加する点がこのプログラムの大きな特徴である。また観光省の他に、農村地域開発省・農業省・健康省・教育省も参加した総合政策となっている。

ホームステイプログラムの登録条件は、各場所でホストファミリーが10世帯以上いることであり、一つのホームステイプログラムに参加する村は一つに限られていない。更に、伝統的なマレーカンポンの環境と民家・伝統的なスポーツ・文化的なゲームや踊り等の存在も登録条件になり、マレー半島の農村では、自然集落の伝統農村が主な対象となっている。

参加する村民がホームステイ委員会を設立し、村長あるいは農業委員会の会長がホームステイ委員会の会長になっている場合が多い。ホームステイ委員会は村の経済活動と関連しており、生活文化・自然資源を活用したプログラムを決定する。この委員会は、観光省とホストファミリーの仲介者にもなっている。

このプログラムでは、農村におけるマレーカンポン・マレー民家・マレー文化・マレー料理が主な内容となっており、各州・地区・村・コミュニティの個性がそれぞれのホームステイプログラムを特徴づけている。

1995年から2012年にかけて、ホームステイプログラムに参加している地域の観光産業と参加する村民の収入が上昇している。更に、農村地域開発省と農業省はこのプログラムに参加する村の開発を優先的に進めている。

現在、マレー半島とボルネオ島では、159のホームステイプログラムが存在し、236の村と3,424世帯のホストファミリーが参加するまでに成長している¹¹⁾。

IV セランゴール州におけるドラニホームステイの実態

1 セランゴール州のホームステイプログラム

セランゴール州には、464の農村集落があり、その中で、430の伝統農村・8つのオランアスリ村・9つのフェルダ村・19の計画村がある³⁾。農村集落の94%を占める伝統農村のうち稻作村は州の北側・果樹栽培村は南側に分布している。セランゴール州のホームステイプログラムに参加している農村は、主に海辺に位置する稻作村と果樹栽培村であり、マレー系民族でもマレージャワ人が多く住む地域である。1957年のマレーシア独立後、独立以前にジャワ島からマレーシアに移住してきたインドネシア人（ジャワ人）もマレー系民族として位置付けられ（憲法で保障）、ブミプトラとして権利を持ち、住んでいる農村もマレーカンポンと呼ばれている。

図1で示すように、この州には現在、15のホームステイプログラムが存在し、18の村と458世帯のホストファミリーが参加している¹¹⁾。本論で対象とするのは、その中のドラニホームステイ（Kampung Sungai Haji Dorani Homestay）である。表2で示すように、ドラニホームステイは2012年に、セランゴール州でホームステイプログラムの収入と観光客の数によって3位になり、成功事例として観光省に認定されている。

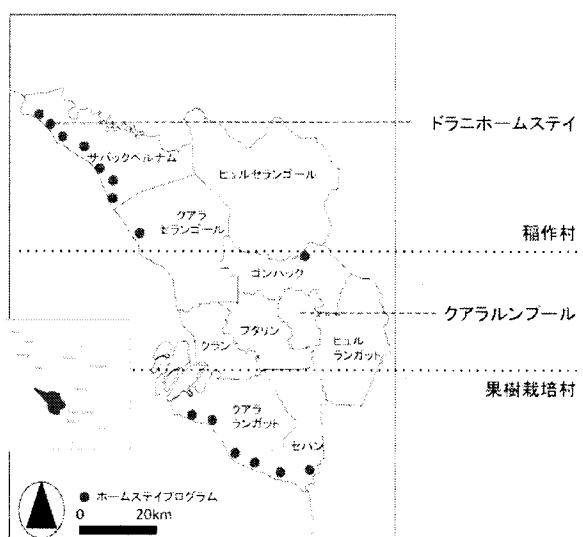


図1 セランゴール州でのホームステイプログラムの位置

Fig.1 The Location of Homestay Programs in Selangor

表2 セランゴール州でのホームステイプログラムの
収入と観光客の数（2012年）

Table 2 Incomes and Tourist Received at Homestay Programs in
Selangor (2012)

| ホームステイプログラム | 収入 (RM) | 観光客の数 |
|-------------|----------------|--------------|
| バングリス | 543,849 | 7,324 |
| スンガイ・シレ | 440,114 | 6,899 |
| ドラニ | 287,520 | 5,091 |
| イル・マニス | 272,487 | 2,665 |
| ボーガンビラ | 144,378 | 1,857 |
| エンダ | 124,745 | 5,616 |
| カンチョン・ダラット | 108,960 | 2,989 |
| パピュスレム | 84,465 | 700 |
| バテュ 23 | 74,733 | 2,443 |
| ラン・テンガ | 35,244 | 1,100 |
| スリ・カヤンガン | 24,602 | 242 |
| テンギ | 17,600 | 185 |
| クンダン | 17,300 | 333 |
| バテュ・ラウット | 4,650 | 85 |
| セピントス | 1,100 | 70 |

出典：マレーシア観光省（2012）¹¹⁾

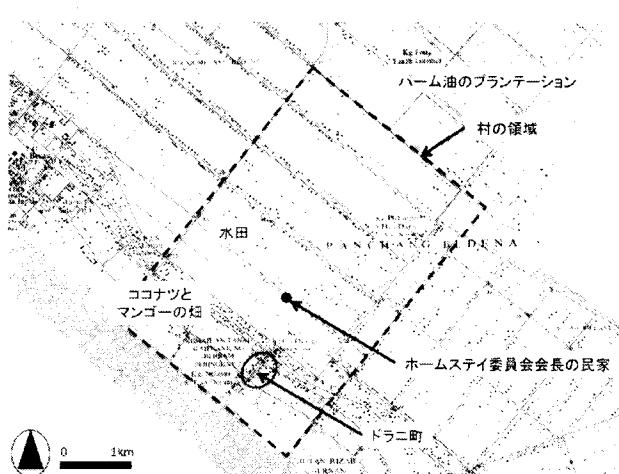


図2 ドラニ村の概要図

Fig.2 Outline of Kampung Sungai Haji Dorani

2 ドラニホームステイの実態

ドラニホームステイはセランゴール州北部にある稻作村のドラニ村（Kampung Sungai Haji Dorani）の村民によって運営されている。この村は1910年代にインドネシアのジャワ島からマレーシアに移住してきたジャワ人と周辺の村に住んでいたマレー系民族が移り住んだところである。その当時、ジャワ人は平地で稻作を行い、マレー系民族は海辺でココナツの畑を開墾していた。1932年のイギリス時代に、村に運河が構築され、稻が主な農作物となった。1941年に、他の地域から中国系がこの村に移住し、村の中心に日常用品店を開き、現在、ドラニ町（Pekan Sungai Haji Dorani）という小さな中国系街を作った。その後、農業が多様化し、マンゴーとパーム油が増

加し、海辺には新しい漁村が農業省によって建設され、漁師もいる。現在のドラニ村の概略を図2に示す。

ドラニ村では現在、2,042人（マレー系民族が1,972人・中国系が67人・インド系が3人）、475世帯が住んでいる。村民は79%が農家であり、残りが漁師と農産物加工業の経営者として働いている。

他のマレーカンポンと同様に、ここでは、行政が組織した村安全開発委員会があり、村民と市役所の仲介者になっている。村安全開発委員会の中には、村民達が安全・経済・社会と文化・教育・宗教・若者・観光・女性の各委員会に参加している。更にここでは、村の要所にモスクあるいはスラウ（モスクより小さなお祈り場）があり、独立以前の基幹的な社会組織として住民によるモスク委員会あるいはスラウ委員会が存在していた。独立後、モスク委員会とスラウ委員会のメンバーは、村安全開発委員会の組織としても位置づけられ、その宗教委員となつた。このような伝統的な村の行政組織は「カリアシステム」（kariah system）と呼ばれている。「カリア」という言葉はアラビア語で「村」を意味し、マレーカンポンにおける古くからの社会システムである。

1990年代に、都市への若者の流出に伴う人口の減少が深刻化し、民家の空き部屋の増加も見られるようになつた。その当時、農業省の幹部がドラニ村に訪れた折に、空き部屋問題を重視し、その対策として村民にホームステイプログラムへの参加を勧めた。それが契機となり、1996年にドラニホームステイとホームステイ委員会が作られ、当時の農家委員会の会長がホームステイ委員会の会長として村民達に選ばれた。ホームステイ委員会の委員とホストファミリーとして参加する村民には、農村地域開発省によってホームステイに関する経営トレーニングが提供されている。更に、観光省は村にプログラムのための公共施設の整備に対する支援を与えている。

現在、ホームステイ委員会は8人の委員がおり、ホームステイプログラムの内容を決定し、観光客のための公共イベントを運営している。ホストファミリーの数は、1996年に8世帯から始まり、現在は、隣接する村の村民も参加して、31世帯に増加している（このようなホームステイは隣接集落と連携して拡張される場合もある）。

稻作の農家の平均月収はRM700（約21,414円）だが、ホストファミリーとして参加する村民は別にRM500（約15,295円）からRM1,000（約30,591円）の収入を得ている。村民達は平日に稻作を行い、週末にホストファミリーとして参加することが多い。観光客の参加費はホームステイ委員会（会長が管理）に支払われ、委員とホストファミリーに配分される。このプログラムに参加していない村民はお土産物の販売や工場と畑への見学ガイドの

収入があり、経済的な利益を得ている。

ドラニホームステイの主な特徴はドラニ村の美しい稻作村の景観と典型的な伝統的マレーカンポンの環境である。この村の伝統的な環境は、農村地域開発省が策定した「美しい村コンテスト」でも評価され、1990年に優勝した。水田に囲まれている高床で木造の伝統的マレー民家と裏庭にある鶏の小屋に見られる伝統的な農家の生活が魅力となって、マレー文化とジャワ文化の混合した独自の文化と環境を作り出している。稻作の景観や伝統的民家が存在するホームステイ委員会の会長やホストファミリーの民家は、よく映画やドラマにも登場している。

このホームステイプログラムには、国内の観光客だけでなく、外国の観光客もよく訪れている。訪れている観光客は、モチベーションキャンプ^{注2)}あるいは修学旅行を行う小学生から大学生までの団体・週末旅行として来る家族と会社員の団体が主である。プログラムの目玉のひとつは伝統的マレーの結婚式や祭りであり、ホームステイで宿泊する人も少なくない。

観光客に提供されるパッケージは、1日から2泊3日までの週末旅行の単位で作成されている。プログラムの内容はホームステイ委員会が村の経済活動・生活文化(特にジャワ文化)・自然資源を活用して作成し、観光客の人数と観光客のリクエストによって変更することが可能である。ドラニホームステイの2泊3日のパッケージの内容を事例として表3に示す。

観光客は郷土食と宿泊はホストファミリーの民家で提供され、伝統芸能をはじめとする公共イベントは、ホームステイ委員会の会長の民家で行われている。観光客はホームステイ委員会の会長の民家でココナツドリンクと伝統的な楽器の演奏で迎えられる。団体の観光客の場合、4人以下の単位でホストファミリー宅に分けられ、朝食と夕食をとる。昼食は普段大勢で会長の民家でとるが、委員達とホストファミリー達がゴトンロヨン(gotong-royong:伝統的な相互扶助、村民達は料理と一緒に作ったり持ち寄って会食したりすること)で料理を作っている。ゴトンロヨンはマレー系民族の日常生活の習慣であり、祝祭・結婚式・公共施設の掃除等の時に多い、村中に住む村民達が参加する場合が多い。この習慣の存在によって、ホームステイ委員会の委員とホストファミリーの間の協力がうまく機能しており、このプログラムの成功の一因となる。

料理以外には、稻作・釣り・バティック彩色の体験と水田・畑・農産物加工業の工場への見学がプログラムの内容になっている。夜には、ドラニ村の若者達によって行われる伝統的な踊り・楽器の演奏・ゲームの文化的パフォーマンスがある。これらはマレーとジャワの伝統的

なものであり、かつては結婚式や祭りなどで見られていたが、現在、農村の生活や結婚式の現代化によって失われつつあった。プログラムの内容に入っている文化的パフォーマンスによって、伝統的な踊り・楽器の演奏・ゲームは再現され、ホームステイプログラムは伝統文化の保全に対する役割をも担っている。更に、パフォーマーとしての若者の参加によって、若者減少問題の解決にもつながっている。

ドラニホームステイの2009年から2012年にかけて、訪れる観光客の数と得た収入を表4で示したが、ホームステイプログラムの経済効果については、伸び悩みもあるようである。農家達は、観光産業と宿泊経営に慣れておらず、平日の稻作農業を主な経済活動として働き、週末のアルバイトのようにホームステイプログラムに参加している者も多い。

彼らにとっては、経済的利益より観光客に農家の伝統的生活を体験させ、マレー文化とジャワ文化を見せることに対して意義を見出しているものが多いということだった(委員会の会長とホストファミリーからの2013年2月に行った現地ヒアリングによる)。ドラニホームステイは村の伝統的な行事や文化、近隣での人間関係をベースにプログラムが組まれており、観光による経済的効果はもとより、コミュニティや民族文化に対する誇りや認識を高める文化的効果もあると考えられる。

表3 2泊3日のドラニホームステイのプログラム

Table 2 Dorani Homestay's Program (3 Days and 2 Nights)

| 日・時間 | 活動 |
|-------------|----------------------------------|
| (1日目) 10:00 | 歓迎会 |
| 12:00 | ホームステイ委員会の会長の民家で昼食 |
| 13:00 | 農業トラックに乗り、ホストファミリーの民家に行く |
| 15:00 | 稻作の体験 |
| 20:00 | ホストファミリーの民家で夕食 |
| (2日目) 10:00 | バティック彩色の体験 |
| 12:00 | ホストファミリーの民家で昼食 |
| 14:00 | 水田を見学 |
| 15:00 | 水田で釣り体験(メンガガウ:手で魚を捕る) |
| 20:00 | インドネシア(ジャワ島)から伝來した馬の踊りの演奏(クダケパン) |
| (3日目) 10:00 | 農産物加工業の工場を見学 |
| 12:00 | 送別会 |

表4 ドラニホームステイの観光客の数と収入

Table 4 Dorani Homestay's Tourist Received and Income

| 年 | 国内の観光客の数 | 国外の観光客の数 | 収入(RM) |
|------|----------|----------|---------|
| 2009 | 3,526 | 341 | 204,170 |
| 2010 | 6,804 | 713 | 380,474 |
| 2011 | 4,801 | 732 | 282,921 |
| 2012 | 4,627 | 464 | 287,520 |

出典:マレーシア観光省(2012)¹¹⁾

V 結論

本稿では、マレー半島における農村集落の概要と農村地域開発政策の展開を示し、1995年に策定されたマレーシアホームステイプログラムの農村の総合的地域政策における位置づけと可能性を指摘した。

特にマレーシアホームステイプログラムは他の国でのホームステイプログラムと異なり、新しい農村地域開発政策として国家レベルの政策として位置づけられ、観光省が中心となって農村地域開発省や農業省等も参加する総合的な地域政策であること、このプログラムは単なる農村民家での宿泊プログラムではなく、新しいツーリズムプロダクトとして公式に認知されたもので、マレーカンポンにおける「生活体験」を主なコンセプトとしていること、ホストファミリーによって構成されるホームステイ委員会が既存の村委員会や農業委員会と連携し、運営の主体となっていることを明らかにした。

また、マレーシアホームステイプログラムの特徴について、セランゴール州ドラニホームステイの事例分析を通じて、このプログラムに村全体のコミュニティがホームステイ委員会の会長・ホームステイ委員会の委員・ホストファミリーとして参加し、プログラムの内容まで自力で作成していること（運営組織面での特徴）、ドラニ村の美しい稻作の景観・伝統的なマレー民家・混合するマレー文化とジャワ文化の存在がプログラムの個性につながっていることを指摘できた（プログラム内容に関する特徴）。

最後に、マレー農村におけるホームステイプログラムは、農村地域における総合政策として大きな可能性があり、観光による経済的效果はもとより、伝統的な生活体験を通じた文化（環境、景観、民家や食文化、民族芸能、近隣コミュニティとの相互扶助等を含む）の再評価にもつながる可能性をもつことを指摘し、本稿のまとめとしたい。

注

注 1) 「ブミプトラ政策」はマレーシア政府に1970年に策定されたマレー系民族と先住民達への教育・就職・住宅の所有等を優先する政策である。

注 2) 学校によって小学校から高等学校までの学生達が試験を受ける前にモチベーションを上昇するために行う課外コースである。

引用文献

- 1) 宇高雄志（2009）：マレーシアにおける多民族混住の構図，明石書房。
- 2) 宮崎猛（2004）：農村コミュニティビジネスとグリン・ツーリズム-日本とアジアの村づくりと水田農法，昭和堂。
- 3) Ministry of Housing and Local Government (2009): Rural Master Plan; Traditional and Planned Settlement in Malay Peninsula.
- 4) 岩佐和幸（2005）：マレーシアにおける農業開発とアグリビジネス-輸出指向型開発の光と影，法律文化。
- 5) Prime Minister's Department (1996): 7th Malaysia Plan 1996–2000.
- 6) Ministry of Tourism (2001): Rural Tourism Master Plan.
- 7) Prime Minister's Department (2006): 9th Malaysia Plan 2006–2010.
- 8) Ministry of Rural and Regional Development (2009): Rural Action Plan.
- 9) Hamzah, A. (2010): Malaysian Homestays from the Perspective of Young Japanese Tourists: The Quest for Furusato. Center for Innovative Planning and Development Monograph (Prepared for Ministry of Tourism Malaysia).
- 10) Ministry of Tourism (1995): Malaysia Homestay Program, Registration Guidelines.
- 11) Ministry of Tourism (2012): Malaysia Homestay Program, Progress Report.

Summary: This study clarifies the potential of Malaysia Homestay Program at Malay Peninsula, in the current rural development policy on increasing the rural economy and tourism industry. Findings reveal the characteristics of this homestay program, focusing on selected case study of Dorani Homestay in Dorani Village at Selangor. These characteristics are clarified based on participation of government ministries, the concept of 'lifestyle experience', community participation, and regional identity.

キーワード（Keywords）：農村地域開発（rural and regional development），マレーシアホームステイプログラム（Malaysia Homestay Program），伝統農村（traditional village），マレーカンポン（Malay Kampung）

（2013年5月19日 原稿受理）

（2013年9月14日 採用決定）